

## 第5章 青谷上寺地遺跡をめぐる諸問題

### 第1節 青谷上寺地遺跡出土土器の数量的分析

#### はじめに

青谷上寺地遺跡からは平成10年度より行った発掘調査によって多量の遺物が出土している。各遺物の概略については本報告および国道調査区の報告<sup>(1)</sup>の遺物に関する記述に譲るが、本来考古学において物差しとなるべき土器については、各型式ごとに代表的なものを図化して説明したにすぎない。これはその膨大な量に起因するものであるが、弥生集落としての実相を明らかにするためには、やはり土器全体の様相を把握することが必要であろう。ここではこのような趣旨で土器の数量的分析を試みる。ただし最初に断っておかねばならないが、遺跡全体の土器を対象とすることはできず、県道調査区6、7区の包含層出土のもののみを対象としている。はなはだ不完全な考察にとどまろうが、傾向を指摘することはできるのではないかと考える<sup>(2)</sup>。調査区の位置関係は第2、3図を、土層堆積状況は第6、7図を参照いただきたい。

土器の時期決定は凡例に掲げた文献に依拠した<sup>(3)</sup>。以下、清水編年における第Ⅱ様式を弥生時代前期末～中期前葉、松井編年のⅠ期を中期中葉前半、Ⅱ期を中期中葉後半、Ⅲ期・Ⅳ期を中期後葉、Ⅴ期を後期初頭、Ⅵ期を後期前葉、Ⅶ期とⅧ期・Ⅸ期を後期中葉、Ⅹ期を後期後葉、ⅩⅠ期・ⅩⅡ期を後期末、ⅩⅢ期を古墳時代前期初

時 期	器 種	7 区	6 区	計	時 期	器 種	7 区	6 区	計
縄文晩期	深鉢	2		2	弥生後期前葉～中葉	壺	1		1
		2		2	0.01%	器台	2		2
弥生前期末～中期前葉	壺	133	221	354	高杯か器台	1		1	
	甕	380	953	1333	4	4	0.02%		
	鉢	1	3	4	弥生後期中葉	壺	62	7	69
	蓋	2	5	7	甕	2265	640	2905	
	ミニチュア	1		1	高杯	1		1	
		517	1182	1699	器台	211	22	233	
弥生中期中葉					高杯か器台	1		1	
	壺	106	122	228	2540	669	3209	16.62%	
	甕	366	490	856	弥生後期後葉	壺	17	6	23
	鉢	19	26	45	甕	562	201	763	
	高杯	18	13	31	器台	7		7	
	器台		1	1	586	207	793	4.11%	
	高杯か器台		2	2	弥生後期初頭～後葉	壺	65	3	68
		509	654	1163	甕	25	2	27	
弥生中期中葉～後葉					鉢	13	3	16	
	壺	7	1	8	蓋	38	9	47	
	鉢	4		4	高杯	137	22	159	
	蓋		1	1	器台	75	9	84	
	高杯	3		3	高杯か器台	2	1	3	
	高杯か器台	10		10	ミニチュア	1		1	
		24	2	26	356	49	405	2.10%	
弥生中期後葉					弥生後期末	壺	13	1	14
	壺	587	92	679	甕	1756	433	2189	
	甕	1855	218	2073	1769	434	2203	11.41%	
	鉢	23	4	27	弥生後期末～古墳前期初頭	壺	70	7	77
	蓋	1		1	甕	26		26	
	高杯	156	16	172	鉢	1		1	
	器台	49	1	50	蓋	2	1	3	
	高杯か器台	91	9	100	高杯	167	17	184	
	台形	1		1	器台	331	75	406	
	ミニチュア	1		1	高杯か器台	3		3	
		2764	340	3104	低脚杯	81	15	96	
弥生中期後葉～後期初頭					甕	3		3	
	壺	128	10	138	684	115	799	4.14%	
	甕	878	119	997	古墳前期初頭	甕	38	12	50
	高杯	11		11	38	12	50	0.26%	
	高杯か器台	225	23	248	古墳以降	壺	3		3
		1242	152	1394	甕	262	36	298	
弥生後期初頭					高杯	341	45	386	
	壺	136	10	146	606	81	687	3.56%	
	甕	1640	145	1785	時期不明	壺	2		2
	鉢	1		1	甕	4		4	
	高杯	2		2	高杯	2		2	
	器台	5		5	ミニチュア	7		7	
		1784	155	1939	15	15	0.08%		
弥生後期初頭～前葉					弥生後期前葉	壺	74	9	83
	壺	1		1	甕	1391	239	1630	
	甕	2	1	3	鉢	3		3	
	鉢	2		2	器台	10		10	
	器台	61	16	77	高杯か器台	1		1	
	高杯か器台	4		4	1479	248	1727	8.95%	
		70	17	87	14989	4317	19306	100%	

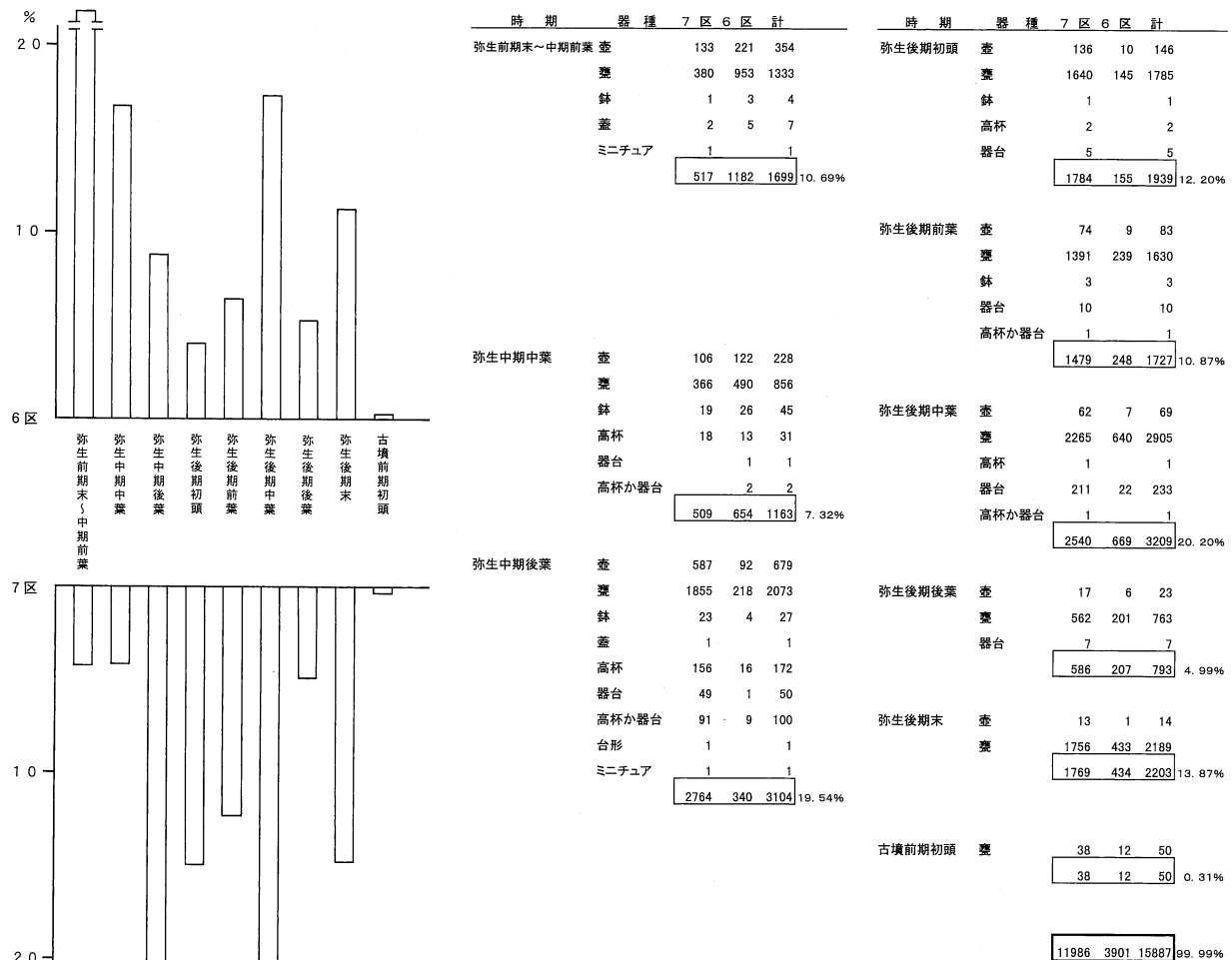
表27 6、7区土器一覧

頭と呼び、それより新しいものは古墳以降と一括する。須恵器についてはカウントしていない。

県道調査区6、7区の土器様相

6区では4,317点、7区では14,989点の合計19,306点を確認した。内訳は表27に示したとおりである。概略的に見ると、土器は前期末～中期前葉から一定量の出土をみせ、中期中葉では割合としては変わらないが中期後葉に至り大きく増加する。これは大規模な護岸をもつ溝やSA群と呼んだ施設が連綿と作られた状況を確認した遺構のあり方とリンクするものである。後期に入ると前葉までは減少傾向を示すが、中葉で大きく増加する。後葉がかなり少ないものの後期末では一定の割合を占め、この段階には環濠は機能していないのであるが、多数の土坑群の存在もあり集落としては継続していたことが分かる。これが古墳時代前期初頭に至り激減し、拠点集落としての終焉を迎える。古墳以降には奈良時代のものも含んでいるが、それでも割合としては低く、以降もかつての盛行を取り戻すことはなかったようである。

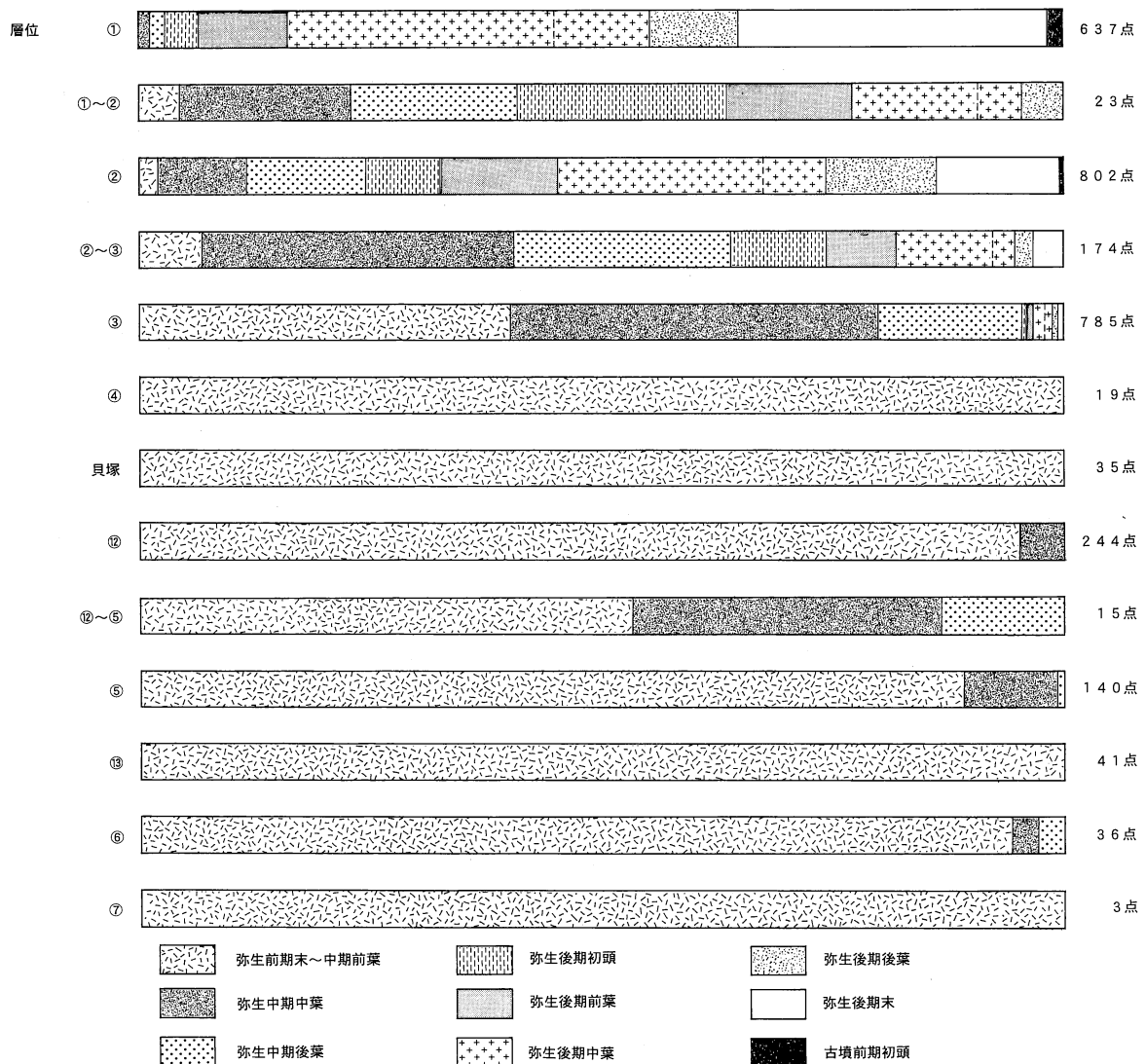
この19,306点には時期が細かく特定できなかったものもかなり含んでいる。こうしたものを除外して、6区、7区別に示したものが第421図である。全体の傾向は表27に示したものと変わらず、中期後葉と後期中葉の増加と古墳時代に至り激減した様子がわかるが、調査区の違いで土器の様相が異なることを表している。6区では前期末～中期前葉が最も多く、後期初頭に掛けて減少していく。全体として捉えられた中期後葉での増加はここでは示さない。その後は後期中葉に大きく増加し古墳時代に至り激減する。7区では前期末～中期中葉は少なく、中期後葉で大きく増加し、その後減少傾向を示しながら後期中葉で再び増加する。終焉の様相は6区と同じである。この違いは6区が微高地上であり、7区が微高地縁辺部から低湿地にあたるという立地の違いなのであろうが、注意しなければならないのは両調査区で土器の数が大きく異なっていることで、平均化した場合、全体の77%を占める7区の様相にどうしても影響されることになる。第2章でふれたように微高地上の6区では前期末



第421図 6、7区における層別土器組成

～中期前葉に溝に区画された高床建物群が建ち並んでいたことが想定され、区画の方向性はその後も引き継がれていたことを考えると、全体としては中期後葉段階に集落が大きく変貌したことは事実であろうが、6区の土器のあり方に示されたように集落形成段階より一定の集落規模をもっていたと理解すべきであろう。

後期中葉から後葉の変化も問題をはらんでいる。土器総数に占める割合でいうと後期中葉の20%から後期後葉は5%に減少しており、あたかも集落に変動が起きたかのようである。確かにこの段階には集落を囲む環濠は埋没してきており、多量の人骨が環濠に埋められたのもこの時期である。しかも人骨には多数の殺傷痕が見られた。こうした状況で土器数が急減したという可能性もないではないが、後期末には再び土器の数量が大きく増加しており、集落の断絶は考えにくいように思われる。後期中葉から後葉の土器型式、特に松井Ⅷ～Ⅸ期とⅩ期の捉えかたに問題はないであろうか。今回集計した土器は包含層出土という性格のものであるうえ破片が多かったため、口縁部に施された多条沈線文を一部ナデ消しているものをⅧ～Ⅸ期（後期中葉）、ヨコナデのみのものをⅩ期（後期後葉）としたのであるが、そもそも両者は分けられるものであろうか。松井の提示したⅧ期からⅩ期の指標となる遺跡・遺構の土器を見ると、まとまった資料がそう多くないという資料的制約があるうえ、Ⅷ～Ⅸ期においても口縁部の多条沈線文を一部ナデ消すものとヨコナデのみのものが併存している場合があり、両者を時期差として明確に区別しにくいように思われる。もちろん細かく見れば口縁下端部や体部・底部といった形態に差異を見出すことは可能であり、それが土器編年の正しい方法なのであろうが、土器の集計結果と合わせ考えるとⅧ～Ⅸ期とⅩ期をあわせて後期後葉と理解できないだろうか。仮にそうだとした場合、後期段階の甕9,322点の内訳が



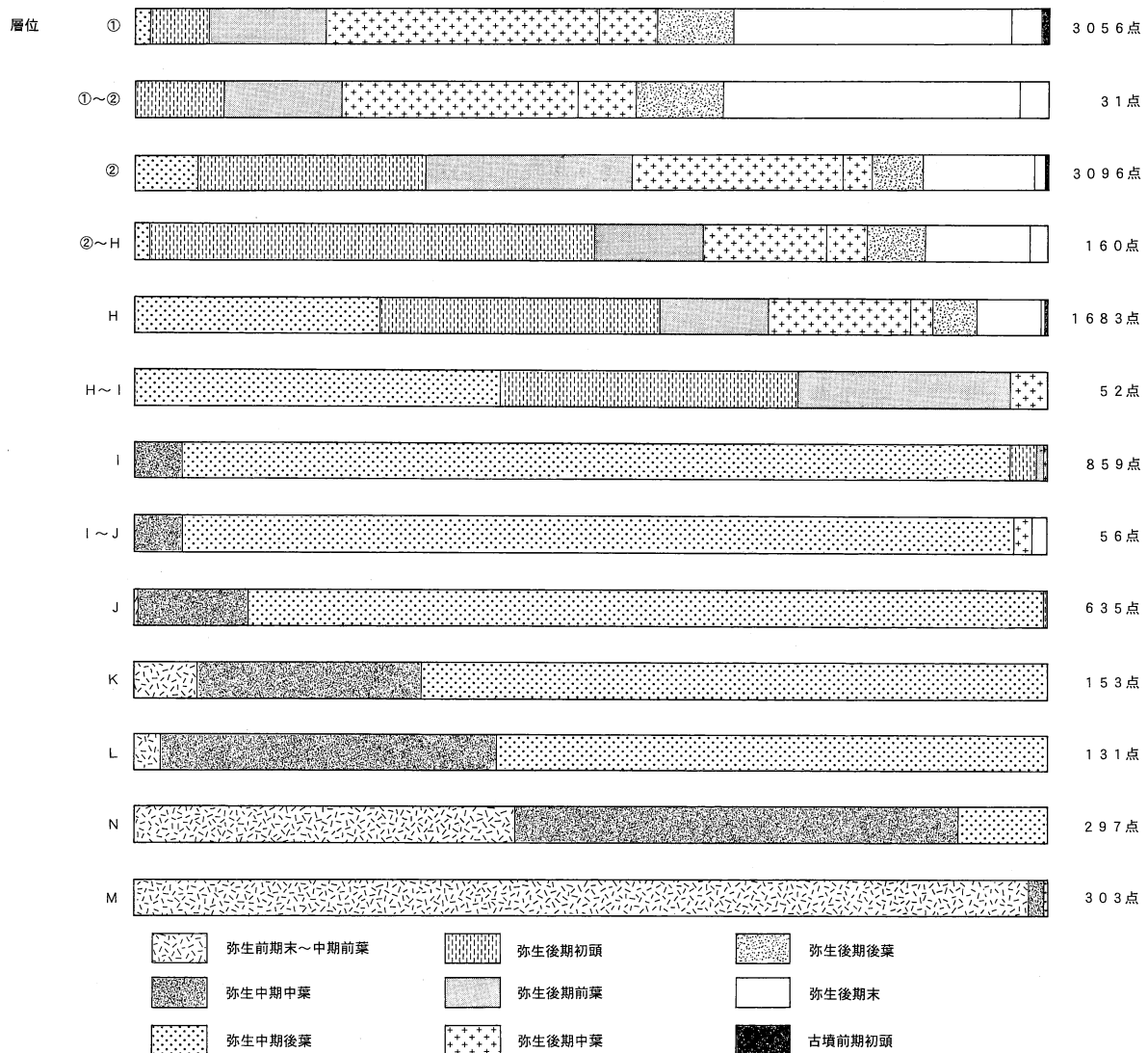
第422図 6区層位別土器組成

後期初頭1,785点（19.1%）、後期前葉1,630点（17.5%）、後期中葉2,373点（25.5%）、後期後葉1,295点（13.9%）、後期末2,189点（23.5%）となり、大きな断絶は認められなくなる。本書作成にあたっては松井編年に大幅に依拠しておきながら、またそれに代わる編年案も持ち合わせていないままに、思いつきのようなことを述べたが、とりあえず問題提起をしておきたい。

**土器型式と層位の関係**

現地調査においては層位を認識し、層ごとに遺物を取り上げている。各層位における土器の様相をもって共伴する遺物や遺構の時期決定を行っていることもあるので、ここにその内容を示しておきたい。数値を図化するに際して対象とした土器は、時期不明や1型式に限定できないものは除いている。また取り上げ時に層の特定ができず複数の層位のなかで理解したものは、直接上下関係をもつふたつの層位に限定できるものを対象とし、それ以外は除外した。したがって6区2,930点、7区10,546点が検討対象となる。

結果は第422、423図に掲げた。土器の数が少ない層位も掲載しているので注意が必要だが、6区では④～⑦層が前期末～中期前葉に属する。③層は前期末～中期前葉の土器をかなり含んでいるが、土質のよく似た⑫層を③層と誤認して取り上げたもので、基本的には中期中葉～後葉の遺物包含層である。②層は後期～古墳前期初頭と捉えられる。7区ではM層が前期末～中期前葉の遺物包含層である。この層は微高地に形成された貝塚の先端部と解釈している。N層は中期中葉と理解しており、I～L層が中期後葉の遺物包含層である。②層とH層は後期～古墳前期初頭に属するが、図に示したように遺物の新旧の傾向があるので、基本的にH層は後期に限定できる



第423図 7区層位別土器組成

層位	へら描き			櫛描き			無文		
	総数	口縁キザミ	逆L字口縁	総数	口縁キザミ	逆L字口縁	総数	口縁キザミ	逆L字口縁
④層	7	(4)					12	(6)	
貝塚	10	(7)	(2)				11	(2)	(1)
⑫層	62	(57)	(1)	6	(5)		114	(32)	(7)
⑫~⑮層	2						5	(2)	
⑫~⑬層	2	(2)					1	(1)	
⑤層	36	(30)	(1)	9	(7)	(2)	54	(14)	(1)
⑬層	13	(10)					24	(7)	
⑤~⑥層	36	(3)					4	(2)	
⑥層	6	(4)	(1)	1			15	(5)	
⑥~⑦層							1		
⑦層	1	(1)					2	(1)	
6区 全体	293	(240)	(11)	64	(49)	(15)	596	(189)	(35)
7区 全体	85	(55)	(2)	36	(20)	(11)	259	(63)	(16)
合計	378	(295)	(13)	100	(69)	(26)	855	(252)	(51)

口縁キザミ・逆L字口縁は総数に対する内書き

第424図 6区における前期末~中期前葉の層別別土器組成 (甕)

層位	甕の口縁部		甕の口縁部		壺の口縁部	
	拡張する	拡張せず	装飾する	装飾せず	装飾する	装飾せず
H層	103 56.3%	80 43.7%	42 15.2%	234 84.8%	29 31.2%	64 68.8%
H~I層	8	6	2	17	1	4
I層	408 72.5%	155 27.5%	72 10.6%	607 89.4%	29 27.4%	77 72.6%
I~J層	25	7	8	33	3	6
J層	216 62.4%	130 37.6%	68 14.1%	414 85.9%	36 26.7%	99 73.3%
J~K層	13	10	2	22		1
K層	38 63.3%	22 36.7%	19 20.2%	75 79.8%	10 35.7%	18 64.3%
K~L層	2	5	2	6		1
L層	29 56.9%	22 43.1%	10 14.3%	60 85.7%	7 36.8%	12 63.2%
N層	7 63.6%	4 36.4%	16 64.0%	9 36.0%	10 83.3%	2 16.7%
合計	849 65.8%	441 34.2%	241 14.0%	1477 86.0%	125 30.6%	284 69.4%

第425図 7区における中期後葉の層別別土器組成 (壺・甕)

ものと考えている。注目したいのは①層である。ここには須恵器や古墳時代以降の土師器が含まれていたうえ、土器も小片が多かったため、古墳時代か奈良時代に二次的に動かされた整地層ではないかと考えていた。しかし須恵器をカウントしていないものの古墳時代以降の土師器が6区で67点、7区で440点と意外に少なく、また遺跡内には古墳時代以降の遺構が極めて少ないこと（第3図）から、ここが当該時期に積極的に土地利用されたとは思えず、多少の攪乱はあるにせよ基本的には拠点集落が終焉を迎えるまでの遺物がほとんどであると理解したい。6、7区双方の①層中の土器型式は弥生後期中葉～古墳前期初頭のものが大部分で、上下関係からも②層より新相を示す段階のものであろう。第3章の遺物の記述では慎重を期して①層を時期不明に近い扱いをしているが、再検討が必要となろう。

6区では前期末～中期前葉の遺物包含層が貝塚を含めれば7枚、7区では中期後葉の遺物包含層が4枚それぞれ認められた。これらのなかで各層位の土器に型式変化があるのかどうかを検討してみた。前期末～中期前葉段階では甕のあり方に施文がヘラ描きか櫛描きか無文かの別があり、また口縁部のキザミの有無、口縁部形態が逆L字状か否かといった点を6区を中心に検討した。結果は第424図に示したが、これらの組合せが層位ごとに変化する様子は窺えない。型式上指摘できることとして、甕の総数1,333点のうちヘラ描き沈線を施すものが378点（28.4%）、櫛描き沈線を施すものが100点（7.5%）、無文のものが855点（64.1%）と無文のものが多いことがある。また口縁部のキザミはヘラ描き・櫛描き沈線を施すものには70～80%の割合で施されるのに対し、無文のものには30%弱と低い。さらに逆L字状口縁はヘラ描き沈線のものとは無文のものには3～6%程度と少ないが、櫛描き沈線のものには25%と高い割合で出現する。中期後葉段階では壺・甕の口縁部に施されるキザミなどの装飾の割合と甕の口縁部の拡張の割合を検討した。これについても層位ごとに変化が認められなかった。第425図に結果を示したが、壺・甕の口縁部装飾は資料数が50以上の層位で見ると、装飾するものが10～20%、装飾しないものが80～90%という割合が変わらずに下位から上位にかけて推移する。甕の口縁部の拡張割合も同じ層位で見ると、拡張するものが60～70%、拡張しないものが30～40%程と層位による変化がない。ただひとつ指摘できるのは中期における頸部貼り付けの指頭圧痕文突帯についてである。これについては本遺跡での例が少ないことがすでに指摘されている<sup>(4)</sup>。今回の集計では甕に限ると中期中葉後半に8点、中期後葉に39点確認されたが、中期中葉後半と確認できる甕は524点、中期後葉の甕は2,073点あり、指頭圧痕文突帯の割合は前者で1.5%、後者で1.9%となる。松江市西川津遺跡の報告で行われた土器集計作業によると<sup>(5)</sup>、平成10、11年度に調査されたV区で出土した中期の甕は690点で、うち頸部に指頭圧痕文突帯を貼り付けるものは63点確認され、9.1%を占めている。山陰地方の各地域での出現率を確認していないが、西川津との比較で見ると本遺跡では頸部指頭圧痕文突帯の割合は極めて低いといえよう。

#### おわりに

今回の集計は発掘した土器すべてを対象としたわけではなく、どれだけ遺跡を代弁するものか分からない。しかし土器の増減は遺構の状況とも合致し、土器以外の多様な遺物のあり方ともリンクする部分が多い。今回の作業で明らかにできた点は、前期末～中期前葉段階の甕のあり方と中期段階の頸部指頭圧痕文突帯の少なさがあり、その他に①層を後期～古墳前期初頭の遺物包含層として再検討すべきことが課題として挙がり、後期中葉～後葉の土器編年の問題提起も行った。

弥生集落の調査報告においては土器の数量的分析が行われることは多くない。山陰地方においても文中に引用した西川津遺跡のほかはあまり例がないように思われる。はじめにも述べたが土器は考古学では物差しであり、弥生時代の人々の日常を映す鏡でもある。このような作業の積み重ねが弥生集落の実相を描いていく基礎となるものと思われる。

（湯村 功）

#### 註

(1) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団。

(2) 実際の作業としては、各グリッドごとに土器片を並べ接合作業を行い、ほぼ接合しなくなった時点で型式別に口縁部の点数を数えた。グリッドを超えて接合することがないとはいえないが、おおむね個体数に近い数を提示できている

のではないかと思われる。

(3) a 清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』。

b 松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集。

(4) 註(1) 前掲文献。

(5) 岩橋孝典編 2001『西川津遺跡Ⅷ』鳥根県土木部河川課・鳥根県教育委員会。

## 第2節 青谷上寺地遺跡の遺物組成

### はじめに

前節では土器の内容を数量的に示した。本節ではそれ以外の遺物についても数量的にまとめたうえで、遺物組成を明らかにし、遺跡の理解の一助としたい。各遺物については調査開始当初から器種等のチェックをしてきたわけであるが、再検討を要するものもあり、ここに掲げたものは今現在の認識であることをお断りしておきたい。検討対象は木器・石器・鉄器・青銅器・骨角器・ガラス製品・土製品で、分銅形土製品・土笛が国道、県道両調査区を合わせた全点となっているが、その他のものは紡錘車が県道調査区出土分のみの集計にとどまり、土玉などはカウントできていない。

集計の方法としては、各遺物を工具・農具といった用途別に大別し、さらに材質別(木器・石器など)に分けた。それらの時期ごとの推移を見るためにⅠ期(弥生前期末～中期前葉)、Ⅱ期(中期中葉～後葉)、Ⅲ期(後期初頭～古墳前期初頭)という時間軸を設定した。時期が細かく特定できないものでもⅠ～Ⅱ期、Ⅱ～Ⅲ期と把握できるものがある。また前節でふれたように①層は弥生後期～古墳前期初頭の範疇で捉えられる可能性があるため、欄を設け掲げた。

### 集計結果

結果を示した表28～30にしたがって説明を加える。それぞれの遺物点数そのものはⅡ期にはⅠ期の数倍に膨れ上がっており、増加傾向はⅢ期に継続する。Ⅱ期段階には鉄器が普及しつつあり、各種木製農具や木製容器が充実し、骨角製漁労具も大幅な増加を見せている。土器や遺構の状況と合わせ考えるとⅡ期でもとくに中期後葉段階に集落が大きく変貌を遂げたかのようなところがある。ところが主要な類別ごとに割合を見ると、工具はⅠ期937点のうち114点(12.2%)、Ⅱ期4001点のうち347点(8.7%)、Ⅲ期5796点のうち582点(10.0%)、農具はⅠ期97点(10.4%)、Ⅱ期277点(6.9%)、Ⅲ期465点(8.0%)、漁具はⅠ期49点(5.2%)、Ⅱ期292点(7.3%)、Ⅲ期293点(5.1%)、祭祀具はⅠ期6点(0.6%)、Ⅱ期104点(2.6%)、Ⅲ期131点(2.3%)で、時期によって大きな変動は認められない。割合が異なるのは武具で、Ⅰ期280点(29.9%)、Ⅱ期270点(6.7%)、Ⅲ期297点(5.1%)とⅠ期に偏る結果を示している。ただしこれには注意が必要で、武具には第3章第3節で剥片石器関係と記述したサヌカイトなどの資料を含んでいる。こうした石材は石鏃製作に伴う可能性が高いためであるが、剥片・碎片にいたるまで1点とカウントしており、石剣や石鏃などの完成された道具1点とは意味合いが異なる。こうした剥片石器関係を除外して割合を出してみるとⅠ期の武具は678点のうち21点(3.1%)、Ⅱ期は3785点のうち54点(1.4%)、Ⅲ期は5647点のうち148点(2.6%)となり、Ⅰ期における偏りは認められなくなる。

こうしてみると遺物の量や内容、遺構の構造などの変化は確かに見られ、中期後葉段階に集落展開の画期を認めるのであるが、それに伴って集落の基本的な性格が急激に変わったということはないように思われる。

### おわりに

遺物を分類し集計した数字が遺跡の実態をどこまで正確に表しているかは分からない。このことは前節でもふれた。しかし本報告もそうであるが、青谷上寺地遺跡から大量に出土した遺物のごくわずかしか公にすることしかできておらず、整理作業もそれによしとすれば遺跡の表面的な理解にとどまるのではないかと思ひ、できるかぎりの遺物を検討対象として俎上に載せたつもりである。目を見張る精巧な品々が重要なものであることはいう

類別	器種	I期	I~II期	II期	II~III期	III期	①層	不明・不詳	計		
工具	木器	斧膝柄	1	1	6		31	1	1	41	
		斧直柄			3		9			12	
		斧柄					5			5	
	石器	伐採石斧	9	12	25	7	23	12	19	107	
		扁平片刃石斧	6	10	20	2	17	11	10	76	
		柱状片刃石斧	4	2	3	1	3		1	14	
		鑿状片刃石斧	4				3		1	8	
		石錐	2		3				1	6	
		敲石	41	8	99	11	171	57	63	450	
		台石	13	2	10	2	19	1	8	55	
		砥石(細)	11	19	69	27	121	115	34	396	
		砥石(粗)	20	22	85	7	119	46	40	339	
		磨石	2	1	9	1	22	5	3	43	
	鉄器	鑄造鉄斧	1		1	2	6	1		11	
		鑄造鉄斧			5	3	1	2	2	13	
		再加工品									
		袋状鉄斧			3	5	8	1	1	18	
		板状鉄斧			3		8		1	12	
		その他斧					1	1		2	
		ノミ				5	2	2		9	
タガネ						3	2		5		
クサビ					1		1		2		
ヤリガンナ				2	5	1	2		10		
刀子				1		4			5		
穿孔具					8	6	4		18		
		114	77	347	90	582	262	185	1657		
農具		木器	直柄平鍬	6		11		1			18
			泥除		2	8		2			12
	直柄又鍬				2	1	7		1	11	
	直柄横鍬			1	4		8	1	1	15	
	曲柄平鍬				3		2			5	
	曲柄又鍬			2	3		23			28	
	鍬柄				1		3			4	
	鍬		1		3		4			8	
	組合平鋤		3	3	20		15		2	43	
	組合又鋤				1					1	
	一木平鋤						1			1	
	鋤柄			2	5	3	25		1	36	
	鋤			2	2	1	8			13	
	田下駄(抉り)				4		85	3	5	97	
	田下駄(穿孔)				17	1	11		4	33	
	田下駄			12	2	27	4	4	49		
	木庖丁			3		38	4	5	50		
	木鎌					10			10		
	田舟					2			2		
	竪杵		2	4	2	14		1	23		
	臼			2		1			3		
	横槌			9	1	12	1	2	25		
	櫛			1					1		
	編み台					1			1		
	不明農具類	2	4	26	2	24		7	65		
	石器	石庖丁	23	16	48	3	27	9	26	152	
		大型石庖丁	22	12	45	7	27	10	12	135	
		石鎌	3	2	4		6	2		17	
		石鍬	1		6		3		1	11	
		凹石	2	2	3	2	18	9	5	41	
農工具破片等		34	5	29	7	56	24	24	179		
鎌				1				1	2		
鉄器	鋤・鍬先					4	1	1	6		
			97	55	277	32	465	68	103	1097	
紡織具	木器	カセ			6	10		1	17		
		紡錘車		1	16	2	17		36		
		その他			2		3	1	6		
骨角器 土製品	紡錘車					2		2	4		
	紡錘車	13		82		9		2	106		
		13	1	106	2	41	1	5	169		

木器・不明農具類は破片などで器種不明のものや農具素材を含む

表28 青谷上寺地遺跡遺物組成表(1)



第5章 青谷上寺地遺跡をめぐる諸問題

類別	器種	I期	I~II期	II期	II~III期	III期	①層	不明・不詳	計	
漁具	木器	舟		3	22	3	30	4	9	71
		櫂		4	19	1	32		4	60
		アカトリ			4		7			11
		浮子		3	5	4	1		1	14
		タモ枠		1	6		6		2	15
		網枠			3	2	4		2	11
		ヤス	1	1	29	5	5		10	51
	石器	石錘		4	11	10	20	8	3	56
		骨角器	漁労刺突具	33	20	149	71	153	8	57
	鉄器	釣針	8	4	29	4	11	2	14	72
		擬餌状製品		1	4	4	16	2	4	31
		アワビオコシ	7	4	11	2	6	1	4	35
		釣針				1				1
	鉄器	ヤス状製品				1	1			2
		銚					1			1
			49	45	292	108	293	25	110	922
	武具	木器	弓			2		2		4
矢柄							3		3	
木鏃					1		7	1	2	11
短甲					1				1	2
刀剣装具					3			3	1	7
戈							1			1
石器		盾		1	13	1	37		1	53
		打製石剣	2	1	4	1	8	1		17
		磨製石剣	4	2	1		3			10
		打製石鏃	10	3	12		5	6	7	43
		磨製石鏃	1							1
		環状石斧	1		3		1	1		6
		サヌカイト資料	108	16	115	8	98	17	52	414
		安山岩資料	111	31	83	4	39	10	40	318
		黒曜石資料	26	6	13	2	11	4	6	68
		その他石材資料	14	1	5		1	1	9	31
		骨角器	骨鏃・根挟み	2	2	10	17	48	2	7
鳴鏑							1	1		2
銅剣形製品			1		1					2
ユヅカ						4	3	1		8
ユハズ					2	3	4	1	2	12
把頭							4			4
鉄器			鉄鏃				3	4	3	10
鉄器		鉄刀				1				1
		矛					1			1
青銅器		銅鏃			1	3	13	7	1	25
			280	63	270	47	297	56	129	1142
服飾具	木器	縦櫛			1		5		6	
		簪			1				1	
		木履					1		1	2
		衣笠		5	11	2	29			47
		サンバ					1			1
	石器	勾玉	1				2	3	1	7
		管玉	1	1	5	4	30	9	3	53
		小玉			1	1	21	1		24
	ガラス製品	ガラス勾玉					1			1
		ガラス管玉					3			3
		ガラス小玉			2		70	7	8	87
		管玉製作資料	86	20	214	6	116	34	67	543
		穿孔具関係	31	6	21	4	38	19	19	138
	骨角器	貝輪・腕輪	1		4	1	2		8	16
		櫛	1		1	3	4		1	10
		簪	2		1	1	2			6
		垂飾品	1		4		14	2	1	22
			124	32	266	22	339	75	109	967
	食事具	木器	匙・横杓子	1	2	42	2	55	2	9
縦杓子				1	2		1			4
片口				1			7			8
			1	4	44	2	63	2	9	125

骨角器・漁労刺突具はヤス、離頭銚などを総称したもので、  
石器・安山岩資料はサヌカイト以外のガラス質安山岩を指す

表29 青谷上寺地遺跡遺物組成表(2)

類別	器種	I期	I~II期	II期	II~III期	III期	①層	不明・不詳	計	
容器	木器	壺				2			2	
		椀・杯など	1	5	30	3	27	1	3	70
		高杯A					43	3	6	52
		高杯B	4	3	17	3	33		4	64
		槽・盤		7	29	9	54	1	8	108
		蓋		1	25	2	34	1	9	72
		その他容器		6	24		63	4	18	115
		曲物			5		4			9
		桶				1	91	6	16	114
		桶底板				6	72	3	12	93
		箱		1	23		11	1	3	39
			5	23	153	24	434	20	79	738
	楽器	木器	琴			5			2	7
					5			2	7	
祭祀具	木器	武器形		3	9	2	14		1	29
		農具形	1		2	1				4
		人形					1			1
		動物形		2	3		6	1		12
		舟形		1	4	1	7		3	16
	骨角器	卜骨		1	67	19	91	9	25	212
		犠牲獣	5		3				2	10
	青銅器	銅鐸					2	1	1	4
		銅鏡					2	4		6
	土製品	分銅形土製品		8	16	12	8	9	3	56
		6	15	104	35	131	24	35	350	
雑具	木器	火鉢臼				9	1		10	
		火鉢杵				20	1		21	
		把手			4		10		16	
		自在鉤			3			2	3	
		腰かけ		5	15	1	22	2	3	48
		机の脚					12	3	15	
			5	22	1	73	7	5	113	
その他	木器	編み物	1	1	44		13		5	64
		縄・紐	1		11		7			19
		織物			1					1
		器種不明	64	63	574	88	969	73	266	2097
	石器	軽石加工品	1	3	8	29	121	87	25	274
		棒状製品			3	3	9	4	2	21
		研磨ある礫	4	1	3	1	10	3	3	25
		擦痕ある礫	6	1	26	9	43	15	11	111
		線刻ある礫	2	2	2		4	7	1	18
		器種不明	25	2	30	13	45	25	21	161
	骨角器	骨針・針入れ	10	1	24	9	22	2	8	76
		刺突具	18	9	40	11	42	4	14	138
		柄・柄状製品			3	6	7	2	1	19
		筒状製品	1		1	1	4	2	2	11
		へら状製品	8	4	17	5	15		7	56
		刻骨			1		6			7
		器種不明	29	4	48	36	72	10	35	234
		加工途上品等	55	19	105	44	295	34	54	606
	鉄器	棒状製品			4	10	8	6	2	30
		器種不明			3	22	24	19	5	73
	鉄片・鉄塊等		1	1	22	13	4	4	45	
青銅器	貨泉					2	2		4	
	棒状製品				1	2	2		5	
		225	111	949	310	1595	77	466	3733	
建築部材	木器	23	48	1166	59	1483	82	634	3495	
合計		937	479	4001	732	5796	699	1871	14515	

木器・高杯Aは従来北陸地方で知られていた弥生後期の精巧な作りのもの。木器・椀、杯などには桶形容器を含む

表30 青谷上寺地遺跡遺物組成表(3)

までもないが、当時の生活を基本的に支えたのは日常一般の道具である。今回の数量的検討では何がいえたということはないかもしれないが、本遺跡のような拠点集落においてはなおさらのこと日常的なものをきちんと見つめる姿勢が必要なのではないだろうか。(湯村 功)

### 第3節 青谷上寺地遺跡出土石器の石材をめぐる

#### はじめに

遺跡より出土する遺物から各地域間の交流を探ることは土器ではよく行われることである。土器はもともと形のないものから一定の形を作り上げることから、見かけ上の形態や技法に違いが現れやすい。石器は素材を打ち欠くなどして仕上げるものであり、土器ほどに形態差を示さない場合が多い。石器を用いて他地域との関係を探る場合は石器石材を調べるのが有効な方法となる。ここでは青谷上寺地遺跡出土石器のうちの一部についてこの方法を採用し、石材の動きを把握することを試みる。

#### 分析の方法と対象

出土した石器は数千点に及ぶ。これらをすべて対象とはできないので、器種を限定したうえで主要な石材を当方で選別し、放送大学赤木三郎氏に鑑定していただいた。鑑定はルーペ・顕微鏡を用いた肉眼観察による。鑑定対象は石斧類に主眼を置き、伐採石斧28点、扁平片刃石斧31点、柱状片刃石斧6点、鑿状片刃石斧6点、砥石20点、石庖丁9点、大型石庖丁5点、石鋸3点の石材を調べた。

#### 遺跡周辺の地質背景 (第426、427図)

遺跡の所在する青谷町とその周辺の地質は大きく見て中生代火山岩類・白亜紀～古第三紀火成岩類・中新世後期～鮮新世火山岩類から構成される<sup>(1)</sup>。中生代火山岩類は白亜紀～古第三紀火成岩類の貫入を受け接触変成作用を受けており、白亜紀～古第三紀火成岩類はかつて中生代侵入岩類とも呼ばれ、侵入時期の差により第1～3期に分けられていた。これらを覆って中新世後期～鮮新世火山岩類が分布しており、三朝層群と呼ばれている。三朝層群でも鮮新世に属するものとして坂本安山岩類・亀尻玄武岩類・鉢伏山板状安山岩類・御冠山安山岩類・三徳山安山岩類・俵原板状安山岩類が遺跡周辺に広く分布する。

#### 石器石材の内容 (表31)

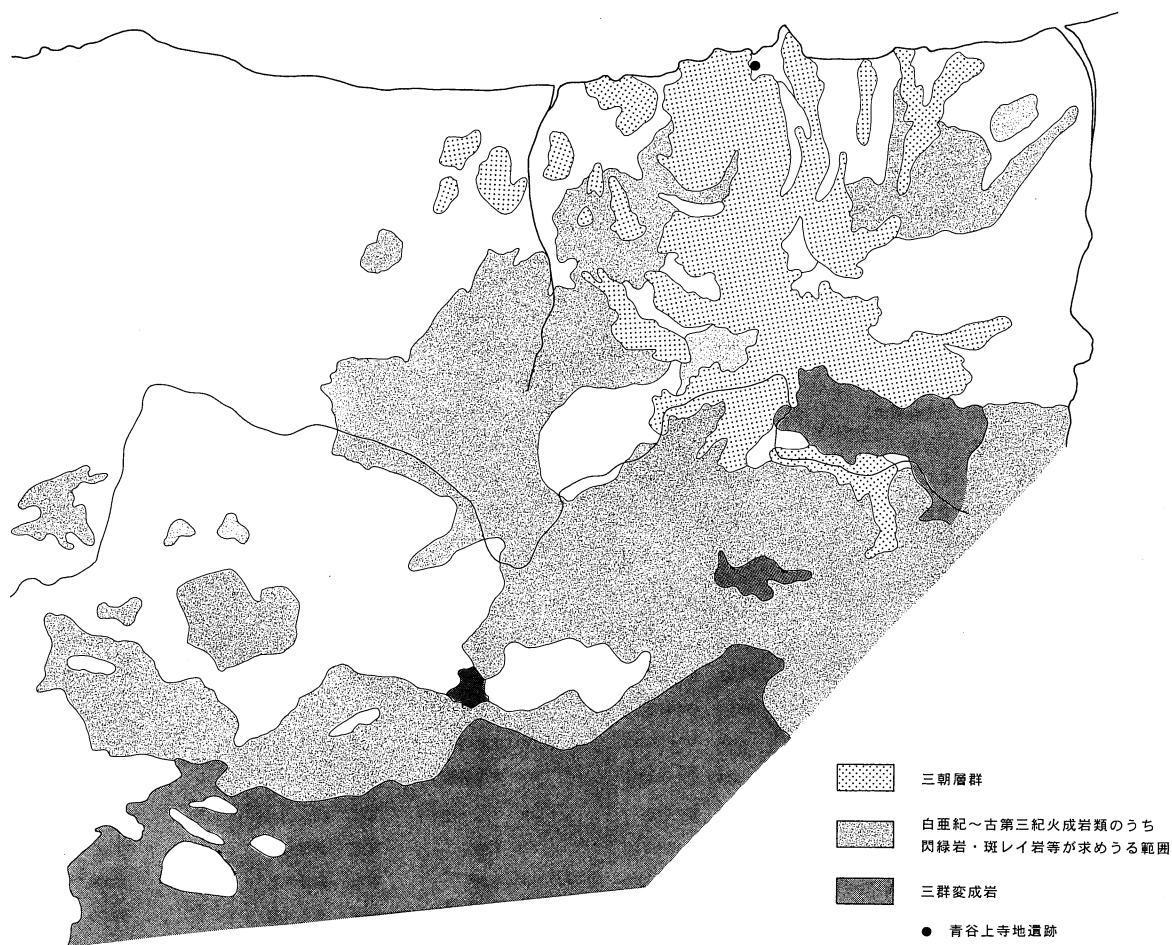
産出地をもとにⅠ～Ⅳ類に4大別した。Ⅰ類は三朝層群に産出地が求められる可能性のある安山岩類などで、遺跡近傍で採取したと思われるものである。Ⅱ類は県内に産出地があるものの遺跡近傍では採取できないものである。白亜紀～古第三紀火成岩類に由来する閃緑岩・斑レイ岩などが相当する。Ⅲ類は県内に産出しないもので、中国山地以南に分布する三群変成岩帯に由来する結晶片岩をはじめとする片岩系の石材や同じ中国山地の分水嶺以南のものとして推定される粘板岩の一群である。Ⅳ類は遠隔地に産出するものである。紀伊半島から四国といった西南日本外縁帯に分布する雲母片岩や九州から中国山地西部の可能性のある輝緑凝灰岩がある。石灰質ラミナの非常に発達した粘板岩は山口県須佐町でホルンフェルスと呼ばれているものや日野郡日南町に産出する松皮石と呼ばれるものに極似する。

#### 石材と器種の関係

伐採石斧は28点のうちⅠ類、Ⅱ類がそれぞれ13点、Ⅲ類が2点である。遺跡近傍かそう遠くないところで石材を入手していたようだ。扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・鑿状片刃石斧といった加工斧の内訳はⅠ類9点、Ⅱ類5点、Ⅲ類27点、Ⅳ類2点とⅢ類の占める割合が非常に高い。Ⅲ類は片岩系の石材や粘板岩といった板状に割れやすい性質をもっており、とくに扁平片刃石斧のように板状の素材が求められたものには有効であったのであろう。Ⅰ類に属する板状安山岩も使用しているものの、製作上の利便のほか強度といった問題も絡んで、より適した石材が求められたものと思われる。Ⅲ類は分水嶺以南に分布する石材であるため、近傍の河床で転石を採取したものではなく、人の手によって運ばれたものである。加工斧にはⅣ類に属するものも認められる。こうしたもの



第426図 中国地方東部の地質図（註（1）b文献をもとに作成）



第427図 遺跡周辺の地質図（註（1）a文献をもとに作成）

第5章 青谷上寺地遺跡をめぐる諸問題

器種	分類	石材	取上番号	挿図番号	器種	分類	石材	取上番号	挿図番号
1 伐採石斧	I類	塩基性安山岩	1367		55 扁平片刃石斧	III類	綠色片岩	14770	第146図18
2 伐採石斧	I類	塩基性安山岩	8409		56 扁平片刃石斧	III類	綠色片岩	13063	第146図19
3 伐採石斧	I類	変朽安山岩	9161		57 扁平片刃石斧	III類	泥質片岩	13110	第146図20
4 伐採石斧	I類	変朽安山岩	14421		58 扁平片刃石斧	III類	縞状花崗岩	939	第149図38
5 伐採石斧	I類	変朽安山岩	9999		59 扁平片刃石斧	IV類	粘板岩(石灰質ラミナ発達)	16370	第146図17
6 伐採石斧	I類	流紋岩質溶結凝灰岩	8138		60 柱状片刃石斧	I類	アブライト	40850	第151図43
7 伐採石斧	I類	無斑晶板状安山岩	5500		61 柱状片刃石斧	I類	アブライト	44818	第151図45
8 伐採石斧未製品	I類	酸性安山岩溶岩	40882	第144図14	62 柱状片刃石斧	III類	硬質粘板岩	8296	第151図46
9 伐採石斧未製品	I類	酸性安山岩溶岩	46089	第143図13	63 柱状片刃石斧	III類	黒色粘板岩	4515	第152図47
10 伐採石斧未製品	I類	安山岩溶結凝灰岩	35874	第142図11	64 柱状片刃石斧	III類	硬砂岩	13517	第152図48
11 伐採石斧	I類	含球顆安山岩	6203	第141図10	65 柱状片刃石斧	IV類	「輝綠凝灰岩」	16580	第151図42
12 伐採石斧	I類	角閃石安山岩質溶岩	10101		66 鑿状片刃石斧	II類	閃綠岩	1918	第153図54
13 伐採石斧	I類	塩基性緻密安山岩	13076		67 鑿状片刃石斧	II類	閃綠岩	2485	第153図55
14 伐採石斧	II類	閃綠岩	8862		68 鑿状片刃石斧	III類	粘板岩	16297	第153図50
15 伐採石斧	II類	閃綠岩	14338		69 鑿状片刃石斧	III類	粘板岩	9627	第153図57
16 伐採石斧	II類	閃綠岩?	16084		70 鑿状片刃石斧	III類	粘板岩	15194	第153図51
17 伐採石斧	II類	閃綠岩?	14020		71 鑿状片刃石斧	III類	粘板岩	9171	第153図56
18 伐採石斧	II類	閃綠岩	14402	第139図3	72 砥石(粗)	I類	細粒花崗岩	14655	
19 伐採石斧	II類	閃綠岩	5010	第139図4	73 砥石(粗)	I類	細粒花崗岩	12730	
20 伐採石斧	II類	閃綠岩	4051	第141図9	74 砥石(粗)	I類	花崗岩質アブライト	46627	
21 伐採石斧	II類	閃綠ヒン岩	13969		75 砥石(粗)	II類	粗粒玄武岩	47706	
22 伐採石斧	II類	閃綠ヒン岩	12438		76 砥石(細)	II類	輝石安山岩	36939	
23 伐採石斧	II類	斑レイ岩	9399	第140図6	77 砥石(細)	I類	石英安山岩	39362	
24 伐採石斧	II類	斑レイ岩	9398	第140図5	78 砥石(細)	I類	石英安山岩溶岩	35140	
25 伐採石斧	II類	斑レイ岩	3608	第140図7	79 砥石(細)	I類	花崗岩質アブライト	50486	
26 伐採石斧	II類	輝石安山岩	13064		80 砥石(細)	I類	花崗岩質アブライト	36163	
27 伐採石斧	III類	黒色粘板岩	13514	第140図8	81 砥石(細)	I類	安山岩質凝灰岩	42958	
28 伐採石斧	III類	綠色片岩	13801		82 砥石(細)	I類	安山岩質凝灰岩	36017	
29 扁平片刃石斧	I類	板状安山岩	9184	第148図32	83 砥石(細)	I類	石英安山岩凝灰岩	46768	
30 扁平片刃石斧	I類	安山岩溶岩	9618	第149図37	84 砥石(細)	I類	流紋岩質凝灰岩	39032	
31 扁平片刃石斧	I類	石英安山岩	10739		85 砥石(細)	I類	流紋岩質凝灰岩	42996	
32 扁平片刃石斧	I類	ガラス質石英安山岩	11858		86 砥石(細)	I類	流紋岩質凝灰岩	47601	
33 扁平片刃石斧未製品	I類	無斑晶塩基性緻密安山岩	3254	第150図41	87 砥石(細)	I類	流紋岩質凝灰岩	37663	
34 扁平片刃石斧	I類	アブライト	13382	第147図31	88 砥石(細)	I類	流紋岩質凝灰岩	36496	
35 扁平片刃石斧	I類	アブライト	1047		89 砥石(細)	I類	珪化した凝灰岩	46782	
36 扁平片刃石斧	II類	斑レイ岩	4686	第147図30	90 砥石(細)	III類	粘板岩	37615	
37 扁平片刃石斧	II類	斑レイ岩	4983		91 砥石(細)	III類	粘板岩	41621	
38 扁平片刃石斧	II類	ヒン岩	3222		92 石廬丁未製品	I類	角閃石安山岩	36301	第168図119
39 扁平片刃石斧	III類	黒色粘板岩	11376	第149図39	93 石廬丁未製品	I類	無斑晶板状安山岩	17117	第168図118
40 扁平片刃石斧	III類	粘板岩	13684	第146図21	94 石廬丁	I類	アブライト	15770	第168図122
41 扁平片刃石斧	III類	粘板岩	9647	第149図36	95 石廬丁	III類	粘板岩	8153	
42 扁平片刃石斧	III類	珪質粘板岩	14173		96 石廬丁	III類	結晶片岩	17154	第166図108
43 扁平片刃石斧	III類	粘板岩	11691		97 石廬丁	III類	結晶片岩	4816	第166図111
44 扁平片刃石斧	III類	粘板岩	15055		98 石廬丁	III類	結晶片岩	8247	第167図114
45 扁平片刃石斧	III類	粘板岩	9108		99 石廬丁	III類	結晶片岩	14328	第167図116
46 扁平片刃石斧	III類	硬質粘板岩	12913	第146図23	100 石廬丁未製品	III類	結晶片岩	1133	第168図121
47 扁平片刃石斧	III類	硬質粘板岩	15725	第146図24	101 大型石廬丁	I類	石英安山岩	16096	第169図124
48 扁平片刃石斧	III類	点紋粘板岩	13081	第147図29	102 大型石廬丁	I類	石英安山岩	6172	第171図130
49 扁平片刃石斧	III類	綠色片岩	8249	第148図33	103 大型石廬丁	I類	石英安山岩	44805	第170図128
50 扁平片刃石斧	III類	綠色片岩	11111	第149図35	104 大型石廬丁	I類	石英安山岩	13618	第171図129
51 扁平片刃石斧	III類	泥質片岩	14333	第147図27	105 大型石廬丁	II類	閃綠ヒン岩	6163	第172図132
52 扁平片刃石斧	III類	泥質片岩	4874	第147図26	106 石鋸	IV類	雲母片岩	46817	第209図348
53 扁平片刃石斧	III類	砂質片岩	12403	第147図28	107 石鋸	IV類	雲母片岩	13399	第209図352
54 扁平片刃石斧	III類	綠色片岩	8873	第148図34	108 石鋸	IV類	雲母片岩	36727	第209図351

表31 石器石材一覧表

は石材というより製品が搬入されたと考えるほうが自然ではなからうか。

その他の器種は鑑定対象が少ないため確定的なことはいえないが、全体を見るかぎり石庖丁はⅢ類の占める割合が高そうである。逆に大型石庖丁や砥石はⅠ類がほとんどであると思われる。

#### おわりに

はじめにも述べたが今回の検討対象は石器全点ではないので、示した結果も概略的なものに過ぎないかもしれない。しかし伐採石斧は全体の26.2%、加工用石斧は43.9%の石材を鑑定していただいたので、傾向は表していると考ええる。こうした器種以外にも黒曜石・サヌカイト・ガラス質安山岩・ヒスイ・碧玉といった搬入石材を用いた石器も多く、石器以外の遺物の様相と絡めて地域間の交流関係を探っていく必要がある。

本稿をまとめるにあたり赤木三郎先生には大変お世話になった。最後ではあるが深く感謝したい。(湯村 功)

#### 註

(1) 地質構造や石材の分布域などは以下の文献に拠った。

a 村山正郎・大沢 穰 1961『5萬分の1地質図幅説明書 青谷・倉吉』地質調査所。

b 日本の地質『中国地方』編集委員会編 1987『日本の地質7 中国地方』共立出版株式会社。

## 第4節 殺傷痕のある人骨をめぐる諸問題

### はじめに

青谷上寺地遺跡から出土した人骨は、その出土当初より大変な注目を集めていた。その考古学的理由としては、以下の3点が挙げられよう。

1. 出土状況が極めて特異であること。
2. 殺傷痕が認められること。
3. 弥生時代後期後半に属するものであること。

補足して言うならば、従来知られていた弥生時代人骨は墓に埋葬された状態で出土することが一般的で、青谷上寺地例のように環濠の中から散乱状態で出土したことはなかった。また殺傷痕の認められるものが110点と多数にのぼり、伴出土器から弥生時代後期後半と考えられることから、「倭国大乱」との関わりが問題となったのである。

本節では上記3点の事実確認を改めて行った後、ここから派生する問題について若干の考察を加えたい。

### 人骨の出土状況

S D 38から出土した人骨は点数にして5,323点、個体数としては少なくとも109体認められる。寛骨からみた性別の最小個体数は男性35体、女性17体で、年齢構成は表17に示されたとおり15歳までの骨がなく、男性では30～40歳、女性では15～20歳のものが多い。こうした人骨がS D 38の東側肩に沿うように帯状に分布していた。S D 38は3段階の変遷を確認しており、人骨は2段階目に残されたものである。この段階には西側肩に沿って矢板が列状に打たれているが、人骨はその部分には基本的に存在しない。従って微高地側から流出したものが環濠に溜まったというものではない。発掘時には認識できなかったが、その後の分析で同一個体に属する骨が近い位置にあることが分かり、当初考えていたほど人骨は散乱状態にはない。加えて殺傷痕以外の抉られたようなキズも確認されていることから、いったん埋葬されたものを掘り起こしてS D 38に埋めたと考えられるに至った。それは脳組織の一部が遺存していたことから、死後間もないことであったといえる。こういった行為が行われたこと自体特異なのであるが、人骨の出土状況と殺傷痕の存在はとりあえず分けて考えるべきであろう。

### 殺傷痕のあり方

殺傷痕の確認された人骨は110点ある。それは個体数で示せば少なくとも10人分である。第4章第1節で述べられたとおり傷には刺創痕・割創痕があるほか、金属製の武器が嵌入したのもあった。刺創痕には断面紡錘形

や円形となるものがあり、刺し込んだものの断面形態を表している可能性がある。割創痕は基本的にシャープで、薄い刃物のようなものが用いられたのではないかと考えられ、鉄器を想起するのである。武器嵌入例は4例あり、1点は肉眼でも銅鏃と確認できる。他の3点も青銅製であり、形態などから銅鏃の可能性が高い。

#### 人骨の所属時期

S D 38は土器の型式あるいは国道調査区における南西部分の検出例から、弥生時代後期に属するものである。S D 38は矢板の構造などから3段階の変遷が確認できており、人骨はその2段階目に残されたものと判断される。溝という性格上、土器が必ずしも上下関係を保っているわけではないが、第52図に示したように松井X I期以降の土器は人骨よりも上位に埋没しており、それ以前ということは確実である。また人骨の堆積状況を見るとS D 38がかなり埋まった段階で遺棄されていることが分かり、人骨に伴う土器は松井Ⅶ～X期<sup>(1)</sup>、弥生時代後期中葉～後葉と判断している。筆者の理解では第V様式後半～庄内式併行期前半にあたる<sup>(2)</sup>。

#### 弥生後期の実年代

弥生時代の実年代論議は近年特に盛んである。弥生時代の始まり、中期後葉（IV様式）の位置付けなどにとどまらず、弥生時代の終わりについても議論の対象となっている。弥生時代の各期に関して実年代を提示することは筆者にはできないが、人骨をめぐる問題を述べるに当たり弥生時代後期の年代についての理解を明らかにしておく。後期の始まりについては貨泉の出土状況を重視したい。本遺跡のS D 40では後期初頭の土器と共存することが確認された。溝資料という問題と土器の少なさは不確定要素ははらんでいるが、岡山市高塚遺跡袋状土壙18例<sup>(3)</sup>や八尾市亀井遺跡S K 3004例<sup>(4)</sup>も合わせ後期初頭～前半に貨泉がもたらされ、それは中国における鑄造からそれほど時をおかずに入流していると理解すれば弥生後期の始まりは紀元後1世紀前半か半ばと考えられる。弥生時代の終わりは、すなわち古墳時代の始まりである。定型化された前方後円墳の出現をもって古墳時代の始まりと理解しているので、庄内式併行期は古墳時代には含まない。そうした前提で考えれば今のところ古墳時代の始まりは3世紀後半というのが趨勢のようである。そうすると弥生時代後期は二百数十年の時間幅を持つことになり、このなかで第V様式と庄内式併行期が存在することとなる。この間の実年代についてはこれ以上立ち入る力量はないが、第V様式と庄内式併行期が土器様相からそれぞれ前半と後半に区別でき、弥生後期を大別4段階と捉えた場合、人骨の属する第V様式後半～庄内式併行期前半を2世紀後半に比定しても大きな矛盾はないと考える。そのような理解に立てば青谷上寺地遺跡の殺傷痕をもつ人骨は『魏志倭人伝』、『後漢書』に記された「倭国大乱」の時期と重なってくるのである。

#### 弥生時代の戦い

弥生時代の戦いに関しては環濠集落・高地性集落・武器・受傷人骨などをキーワードに研究が進められてきた。その結果弥生時代に戦いがあったことは動かしがたい事実のように思われるが、その具体象というものは不明部分が多い。ここでは山陰地方を中心とした日本海沿岸地域を対象に先のキーワードのいくつかを用いて、弥生時代の戦いを示すと思われる事象の検討を行ってみたい。

まず環濠集落について考える。表32に遺跡を列記し、時期別・地域別にまとめたものが第428図である<sup>(5)</sup>。環濠の消長を視点に掘削時期と廃絶時期を類型化してみると、掘削時期が前期末～中期前葉（A型）、中期中葉（B型）、中期後葉～後期前半（C型）に、廃絶時期が前期末～中期前葉（1型）、中期後葉～後期前半（2型）、後期末～古墳時代前期初頭（3型）に分類できる。この両者を合わせ環濠集落を分類すれば、環濠の掘削と廃絶が前期末～中期前葉で収まるもの（A1型）、中期中葉に掘削され中期後葉～後期前半に廃絶するもの（B2型）、掘削と廃絶が中期後葉～後期前半に収まるもの（C2型）、掘削の時期が不明確なものが多いが、中期後葉～後期前半に掘削され後期末～古墳時代前期初頭に廃絶するもの（C3型）という大まかなグルーピングができる。環濠の掘削と廃絶に注目してみれば、青谷上寺地の殺傷痕の認められる人骨が属する後期後半は日本海沿岸では環濠を掘削した時期でもなければ廃絶した時期でもないという興味深い点を指摘することができる。さらに安来道路関係の調査で明らかになった出雲東部の高地性集落の動きを見ると、後期初頭と後期末の2時期に出現することが明らかになっている<sup>(6)</sup>。これは環濠集落における環濠の掘削や廃絶の時期と共通する一方、問題となる後期後

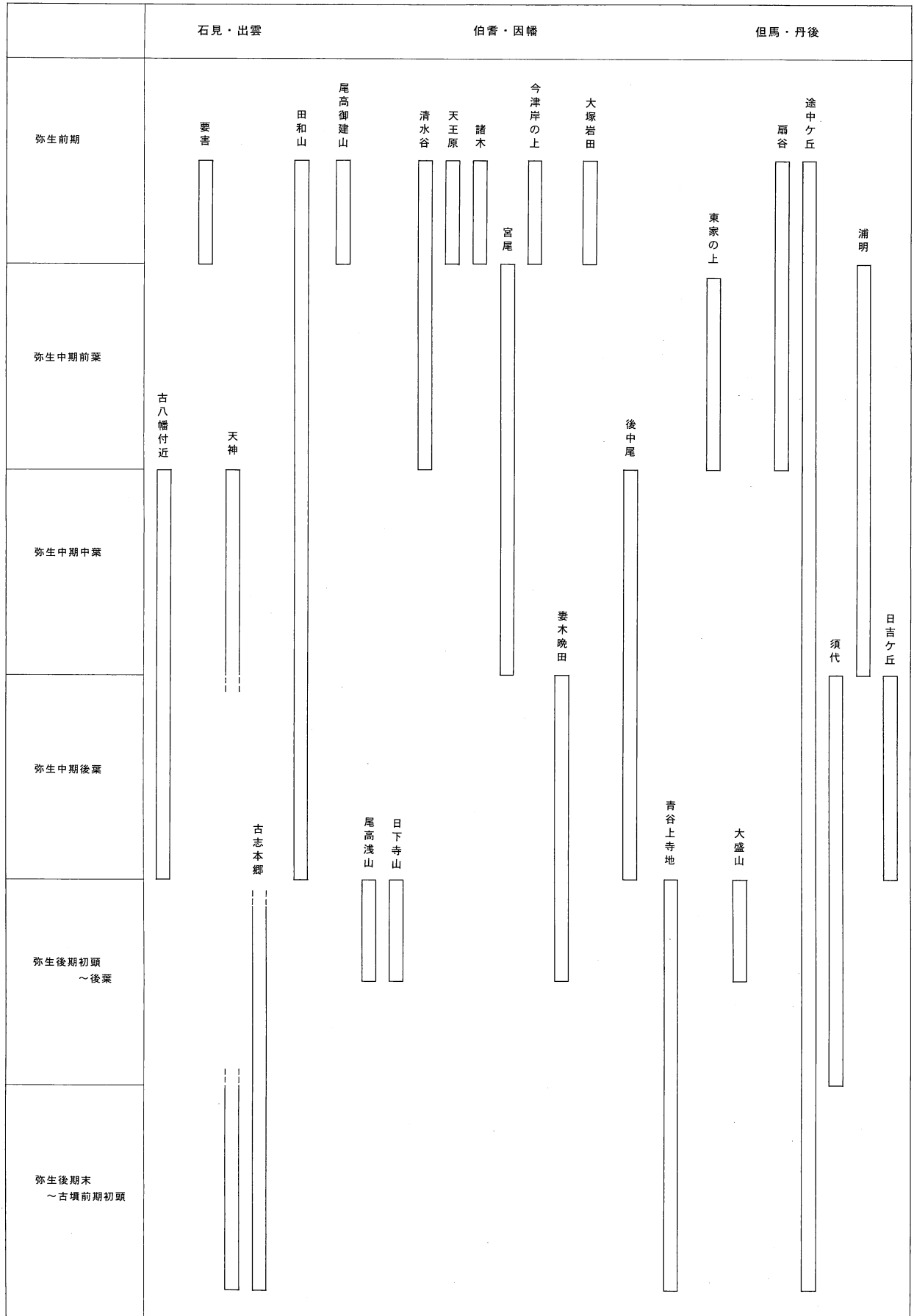
地域	遺跡名	所在地	環濠の掘削時期	環濠の廃絶時期	環濠の類型
石見	古八幡付近	島根県江津市敬川町	弥生中期中葉	弥生中期後葉	B2
出雲西部	要害	島根県飯石郡三刀屋町下熊谷	弥生前期末	弥生前期末	A1
	天神	島根県出雲市天神町	弥生中期中葉	古墳前期初頭	B3?
	古志本郷	島根県出雲市古志町	弥生後期前半?	古墳前期初頭	C3?
出雲東部	田和山	島根県松江市乃白町	弥生前期末	弥生中期後葉	A2
伯耆西部	尾高御建山	鳥取県米子市尾高字御建山	弥生前期末	弥生前期末	A1
	尾高浅山	鳥取県米子市尾高	弥生後期前半	弥生後期前半	C2
	日下寺山	鳥取県米子市日下	弥生後期前半	弥生後期前半	C2
	清水谷	鳥取県西伯郡西伯町大字福成字清水谷	弥生前期末	弥生中期前葉	A1
	天王原	鳥取県西伯郡会見町朝金・市木	弥生前期末	弥生前期末	A1
	諸木	鳥取県西伯郡会見町諸木	弥生前期末	弥生前期末	A1
	宮尾	鳥取県西伯郡会見町天万	弥生中期前葉	弥生中期中葉	A2?
	今津岸の上	鳥取県西伯郡淀江町今津	弥生前期末	弥生前期末	A1
	妻木晩田	鳥取県西伯郡淀江町福岡字洞ノ原、西伯郡大山町大字妻木字晩田	弥生中期後葉	弥生後期前半	C2
	大塚岩田	鳥取県西伯郡名和町大字大塚字岩屋	弥生前期末	弥生前期末	A1
	伯耆東部	後中尾	鳥取県倉吉市上米積	弥生中期中葉	弥生中期後葉
因幡	青谷上寺地	鳥取県気高郡青谷町青谷	弥生後期前半	古墳前期初頭	C3
但馬	東家の上	兵庫県養父郡八鹿町小山字東家の上	弥生中期前葉	弥生中期前葉	A1
	大盛山	兵庫県朝来郡和田山町岡田・柳原	弥生後期前半	弥生後期前半	C2
丹後	扇谷	京都府中郡峰山町丹波・杉谷	弥生前期末	弥生中期前葉	A1
	途中ヶ丘	京都府中郡峰山町長岡・新治	弥生前期末	弥生後期	A3
	須代	京都府与謝郡加悦町字明石小字入谷	弥生中期後葉	弥生後期後半	C3
	浦明	京都府熊野郡久美浜町浦明	弥生中期前葉	弥生中期中葉	A2?
	日吉ヶ丘	京都府与謝郡加悦町字明石	弥生中期後葉	弥生中期後葉	C2

表32 山陰～丹後における環濠集落一覧表

地域	遺跡名	所在地	墓壇の名称	鏝の種類	鏝の平面位置	出土レベル	時期
出雲東部	堀部第1	島根県八束郡鹿島町大字南講武	SX02	打製石鏝14点	胸部7点、つま先付近7点	棺底	弥生前期後半
			SX05	打製石鏝1点	頭部付近		弥生前期後半
			SX28	打製石鏝1点	大腿骨付近		弥生前期後半
	友田	島根県松江市浜乃木町字友田	A区SK01	打製石鏝2点		墓壇上部および埋土中	弥生中期?
			A区SK02	打製石鏝1点	墓壇東寄り	底面直上	弥生中期?
			A区SK08	打製石鏝7点	墓壇南側	底面および直上	弥生中期?
			A区SK10	打製石鏝1点			弥生中期?
			A区SK13	打製石鏝1点		墓壇上位～中位	弥生中期?
			A区SK18	打製石鏝14点	墓壇西寄り	底面および直上	弥生中期?
			A区SK22	打製石鏝34点	墓壇中央付近	底面および直上	弥生中期?
伯耆西部	仙谷3号墓	鳥取県西伯郡大山町大字富岡字仙谷	第5埋葬施設	鉄鏝1点	墓壇中央より南寄り	底面直上	弥生後期前半
伯耆東部	長瀬高浜	鳥取県東伯郡羽合町長瀬	SXY15	打製石鏝1点		墓壇上面	弥生前期
SXY37			打製石鏝1点	棺内		弥生前期	
因幡	布勢鶴指奥1号墳丘墓	鳥取県鳥取市布勢字鶴指奥	SX06	銅鏝1点		底面直上	弥生後期後半
	桂見1号墳	鳥取県鳥取市桂見字下地谷	第1主体	鉄鏝1点	墓壇中央付近	墓壇上面	弥生後期末
第3主体			鉄鏝1点	墓壇西隅付近	底面直上	弥生後期末か	
13号墓			打製石鏝1点	棺内	棺底付近	弥生中期前葉	
但馬	駄坂・舟尾	兵庫県豊岡市駄坂字舟尾	14号墓	打製石鏝1点	棺内	棺底付近	弥生中期前葉
			4号墓	打製石鏝1点	棺内	棺底	弥生中期前葉
			9号墳下層埋葬主体	磨製石鏝2点、打製石鏝5点	棺内	棺底	弥生中期前葉
東山墳墓群	兵庫県豊岡市上鉢山字東山	3号墓第2主体	鉄鏝2点	棺内およびその付近	墓壇中位付近	弥生後期前半	
		3号墓第5主体	銅鏝2点	棺内	棺底および直上	弥生後期前半	
		4号墓第2主体	銅鏝1点	棺内	棺底付近	弥生後期前半	
		4号墓第4主体	銅鏝1点	墓壇東隅付近		弥生後期前半	
		4号墓第18主体	鉄鏝2点	棺内		弥生後期前半	
		3号墓第10主体	鉄鏝2点	棺内	棺底	弥生後期前半	
丹後	三坂神社墳墓群	京都府中郡大宮町字三坂小字有明	G1号墳下層第5主体部	鉄鏝2点	棺内	棺底か	弥生後期後半
	左坂墳墓群	京都府中郡大宮町字三坂小字有明	G1号墳下層第9主体部	鉄鏝1点	棺内	棺底か	弥生後期後半
			26号墓第2主体部	鉄鏝2点	棺内	棺底か	弥生後期後半
大風呂南1号墓	京都府与謝郡岩滝町字岩滝小字大風呂	第1主体部	鉄鏝4点	棺内	棺底	弥生後期後半	
		第2主体部	鉄鏝2点	棺内	棺底付近	弥生後期後半	

表33 山陰～丹後における墓壇内出土の鏝一覧表





第428図 山陰～丹後における環濠集落の消長

半とは時期的なズレがあるのである。

次に墓壇内出土の鏃について検討する。すでに述べたとおり、青谷上寺地では銅鏃およびその可能性のあるものが嵌入した人骨が4例あり、全国的にも鏃の嵌入例または墓壇内出土例が多いことから飛び道具としての鏃の検討は避けられない<sup>(7)</sup>。表33に山陰を中心とする日本海沿岸地域における鏃の墓壇内出土例をまとめた<sup>(8)</sup>。中期後葉以前の石鏃を伴うものと後期以降の金属製鏃を伴うものに分けられる。後者においては丹後での例が多い。この地域の墳墓には鉄製武器や工具が副葬される場合が多く、鏃のみの場合もなくはないが、基本的に墓壇内の鏃は副葬品と思われる。但馬の東山墳墓群では5基の墓壇より鉄鏃・銅鏃が出土しているが<sup>(9)</sup>、木棺の側板が立つ位置にあるものや棺外にあるものが大部分で、人体に嵌入したものとは思えず、やはり副葬品であろう。

青谷上寺地と同じ因幡に所在する2遺跡はどうであろうか。鳥取市布勢鶴指奥墳丘墓S X 06には銅鏃が認められた<sup>(10)</sup>。出土状況からは墓壇内に残されたいきさつは判断できないが、中心主体部の底面形態から埋置された棺が舟底状木棺と考えられることや破碎した土器を供献する点に丹後あるいは但馬といった東の影響を見て取ることができ<sup>(11)</sup>、銅鏃についても副葬品と考えたほうが妥当であろう。鳥取市桂見1号墓は後期末に属するものであり、第1主体と第3主体から鉄鏃が出土している<sup>(12)</sup>。第1主体例は墓壇上面の出土であり、第3主体は写真を見る限り底面直上付近と思われるが、ヤリガンナと並ぶように出土していることから、両者とも副葬されたものと思われる。西伯の大山町仙谷3号墓第5埋葬主体の鉄鏃は底面直上と報告されているものであるが<sup>(13)</sup>、人体に嵌入していたものかどうか判断できない。こうしてみると墓壇内出土の鏃は青谷上寺地人骨にかかわる後期に属するものに限れば、副葬品と判断されるものがほとんどで、人体に嵌入したものと分かるものはない。

#### 青谷上寺地と「倭国大乱」との関係

以上のように見てみると、青谷上寺地遺跡において殺傷痕の残る人骨が埋められた時期、言い換えれば多数の殺傷痕を生じさせる何かが起こった時期というのは、史書に伝える「倭国大乱」の時期と重なるものの、遺跡周辺地域においてはそれを考古学的に証明することができない。「倭国大乱」と呼ばれる争乱は記述によれば国々の争いであり、考古事象に現れる場合は広い地域に共通する社会の動きが見出せるはずである。青谷上寺地の弥生後期後半に起こった出来事は、環濠の掘削や廃絶との関係で顕著に示されたように山陰から丹後までの日本海沿岸地域の中では弥生社会の動きと連動したものとは思えない。断っておきたいが、弥生時代の戦いそのものを否定はしないが、弥生後期後半に青谷上寺地で起こった多数の殺傷痕を生じさせた出来事は、それ以外の考古事象からは「倭国大乱」を直接的に示すものとは断定はできないことがいいたいのである。もちろん人が多数傷つき、埋葬された遺体を掘り起こして環濠に埋め込むことなど、とても尋常なこととは思えない。何かが起こったであろう。しかし安易に「倭国大乱」と結びつけることは危険である。何が起こったのか、それを明らかにすることはできなかったが、近年盛んな「弥生戦争論」に対する問題提起としたいのである。(湯村 功)

#### 註

- (1) 松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集。
- (2) 湯村 功 1998「庄内式併行期の山陰の様相」『庄内式土器研究』XⅧ。
- (3) 平井泰男 2000「高塚遺跡出土の貨泉について」『高塚遺跡 三手遺跡2 (第3分冊)』岡山県文化財保護協会。
- (4) a 寺川史郎・尾谷雅彦編 1980『亀井・城山』(財)大阪文化財センター。  
b 森井貞雄 1999「新しい弥生の年代観 3世紀は古墳時代か?」『卑弥呼誕生』。
- (5) 各遺跡の内容は下記の文献に拠った。  
a 東森 晋 2000「古八幡付近遺跡」『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墳』島根県埋蔵文化財調査センター。  
b 林 健亮編 2001『熊谷遺跡・要害遺跡』日本道路公団中国支社・島根県教育委員会。  
c 瀬古諒子 2001「弥生のいくさ(田和山遺跡と友田遺跡)」『第29回山陰考古学研究会集 弥生時代の戦い 発表資料』。  
d 岸 道三編 1997『天神遺跡第7次発掘調査報告書』出雲市教育委員会。

- e 平石 充・三代貴史編 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会。
- f 勝部智明編 2001『古志本郷遺跡Ⅱ』建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会。
- g 山田真一・鬼頭紀子編 1995『尾高御建山遺跡Ⅱ・尾高古墳群Ⅱ・尾高1号横穴墓』(財)鳥取県教育文化財団。
- h 新井宏則編 1993『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会。
- i 赤井 進編 1975『諸木遺跡発掘調査概報』会見町教育委員会。
- j 中山和之編 1991『今津岸の上遺跡発掘調査報告書』淀江町教育委員会。
- k 岡野雅則編 2001『大塚岩田遺跡・大塚塚根遺跡』(財)鳥取県教育文化財団。
- l 松本 哲・生田和久編 1992『清水谷遺跡』西伯町教育委員会。
- m 岡田竜平・岡田善治編 1982『宮尾遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会。
- n 岩田文章・岩田珠美・植野浩三編 2000『妻木晩田遺跡』淀江町教育委員会。
- o 濱田竜彦編 2001『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2000』鳥取県教育委員会。
- p 下高瑞哉 1994「鳥取県米子市尾高浅山遺跡」『日本考古学年報』45。
- q 米子市教育委員会 1993『米子市内遺跡発掘調査報告書(遺跡分布調査)』。
- r 森下哲哉 1984「後中尾遺跡」『鳥取県大百科事典』。
- s 谷本 進・山田宗之編 1990『小山古墳群・東家の上遺跡』八鹿町教育委員会。
- t 田畑 基・中島 雄編 1995『大盛山遺跡』和田山町教育委員会。
- 丹後の環濠集落については下記に拠った。
- u 加藤晴彦 2000「環濠集落の規模と構造」『季刊考古学別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』。
- v 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会編 2001『北近畿の考古学』。
- (6) 丹羽野 裕 1995「頂上部(I区)で検出された弥生時代後期の竪穴住居跡群について」『陽徳遺跡・平ラI遺跡』建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会。
- (7) 墓壇内出土の鉄について以前簡単にふれたことがある。  
湯村 功 2001「因幡地域」『第29回山陰考古学研究集会 弥生時代の戦い 発表資料』。
- (8) 各遺跡の内容は下記の文献に拠った。
- a 榎原桃代・徳永 隆 2000「鳥根県鹿島町堀部第1遺跡」『考古学ジャーナル』458。
- b 岡崎雄二郎・中尾秀信・佐々木 稔編 1983『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会。
- c 松本 哲編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅲ』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会。
- d 西村彰滋・笹尾千恵子・大賀靖浩ほか編 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告』(財)鳥取県教育文化財団。
- e 中村 徹・西浦日出夫・小谷修一編 1992『東桂見遺跡 布勢鶴指奥墳墓群』(財)鳥取県教育文化財団。
- f 船井武彦・杉谷美恵子・平川 誠編 1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団。
- g 瀬戸谷 皓編 1989『駄坂・舟隠遺跡群』豊岡市教育委員会。
- h 瀬戸谷 皓編 1992『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市教育委員会。
- 丹後の鉄鏃・銅鏃例は下記に拠った。
- i 肥後弘幸 1999「近畿北部(丹後・丹波・但馬)の墓制」『季刊考古学』第67号。
- j 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会編 2001『北近畿の考古学』。
- (9) 註(8) h 前掲文献。
- (10) 註(8) e 前掲文献。
- (11) 松井 潔氏とのディスカッションによる。
- (12) 註(8) f 前掲文献。
- (13) 註(8) c 前掲文献。

## 第6章 おわりに

平成10年度から行ってきた青谷上寺地遺跡の発掘調査事業は、本報告をもって一応完結することとなる。すべてを語り尽くすことはできなかったが、国道・県道両調査区をあわせて今回の調査で明らかになった点を再度記すことでまとめにかえたい。

### 遺構の変遷

遺跡は弥生時代前期末～中期前葉段階に集落としての姿を現す。微高地と呼んだ地形の高まった範囲に残された遺構群は無数のピットと溝が中心で、ピットは建物の柱穴と考えられることから高床建物が建ち並ぶ景観が復元される。これらの建物群を区画する溝はその方向に規則性があり、それは後期まで踏襲されていることから（本報告）、中期に拡大する集落の基礎はすでにこの段階に築かれていたと見ることもできよう。微高地東側縁辺には貝塚が形成されており、当時の食生活の一端を垣間見ることができる。西側低湿地部ではこの段階と思われる水田を検出した（『青谷上寺地1』）。伴出する土器がわずか1点で所属時期は将来的に検討を重ねていく必要があるが、後期の遺構面よりは層位的に下位であることは間違いない。前期末～中期前葉段階の数少ない木器は農具が中心であることも、この段階の生業における農耕の占める割合が低くなかったであろうことを教えてくれる。

中期中葉にはそれほど大きな変化を見せなかった集落は、中期後葉に至り変貌を遂げる。微高地東側を流れる溝（SD27）は長さ2.6m、幅0.7mの大型板材で補強されたもので（『青谷上寺地2』）、砂により埋没していく過程でSAと呼んだ板材を立て並べた構造物が連綿と作りつけられる（本報告）。これらに用いられた板材は建築部材の転用と考えられ、大型建物の存在を暗示するものである。土器の量もこの段階に大きく増加しており、鉄器の普及や華麗な容器類をはじめとする木器、漁労具を主体とする骨角器など生活用具の多様化を見て取ることも可能である。地域の核となる拠点集落として確立されたものと理解できる。

後期初頭には微高地を囲む環濠（SD11、38）が掘削され、以後も維持管理されたようである（『青谷上寺地1』～本報告）。環濠内には矢板が列状に打ち込まれているが、単なる護岸とも思えず区画を非常に意識したものと考えている。弥生後期は精巧な作りの木製高杯などの容器類が認められる時期で、中期に続いて優れた技術を保有していたことがわかる。後期中葉～後葉には多量の人骨が環濠内に埋められる（本報告）。これ以降SD11、38は環濠としての機能を失ったものと思われ、東側に掘られたSD69はなお存在しているとはいえ、環濠集落とははや呼べない。古墳時代前期初頭以降は遺構・遺物とも激減し、集落そのものも終焉を迎えたものと思われる。

### 遺物について

青谷上寺地遺跡は拠点集落であったことと、低湿地に埋もれた遺跡であるが故に遺物の遺存状態は極めて良好である。特筆すべき点を挙げる。

土製品では56点の出土をみた分銅形土製品が挙げられる（『青谷上寺地3』、本報告）。この遺物は吉備に中心をもつとされるものであるが、その中でも分布の中心とされる東高月遺跡群と同数確認されたことになる。分布の中心が吉備にあることは変わらないが、分銅形土製品の系譜や機能を考えるうえで大きな意味をもつことになりそう。土玉は単独で出土した場合漁労用の錘とされることが多いが、本遺跡でヒノキの細枝にひとつずつ結わえた状態が確認され、そうした例がかなりの数に上ったことから、その用途について再考を要することとなった（『青谷上寺地3』、本報告）。具体的な用途は指摘できなかったが、結わえられたものがいくつかまとまって出土することもあり、複数がセットで機能するものであった可能性がある。

石器は多様な内容を示すが、本報告では石材利用についていくつか明らかにしえた。第5章第3節では伐採斧・加工斧を中心とした石材との関係を述べたが、伐採石斧は基本的に近傍で入手できる石材を用い、加工用石斧は遠隔地に産出する石材に依存する割合が高いことが指摘できた。また主として石鏃の素材であったと考えられるサヌカイトは科学的な分析を行っていないものの、瀬戸内から大型の板状剥片で搬入されたものと打製石庖丁を二次的に加工したものが持ち込まれたのではないかと想定される。さらに拳大の礫の状態を持ち込まれたものもあり、これは異なる産出地も予想される。こうした石材の流入を見ると、日本海沿岸沿いだけでなく南北の交流ルートも存在したことが浮かび上がってくる。

鉄器は確実に弥生時代（古墳時代前期初頭を含む）のものでも227点出土した（『青谷上寺地3』、本報告）。鉄片などをのぞいた製品がおよそ半数を占め、なかでも加工斧の割合が高い。多量の木製品や建築部材の背景にはこうした鉄器を抜きにしては語れないであろう。舶載品も一定量保有しているうえ、中期後葉段階からは集落内で鉄器生産が開始されたことも想定され、鉄器が単なる奢侈品ではなく、集落内の生業に深く関わっている姿を思い浮かべることが可能である。

青銅器では銅鐸の存在が挙げられる（『青谷上寺地3』、本報告）。4点出土したうちの3点は突線鈕式の最終段階のもので、日本海沿岸地域における分布の西限を広げることとなった。縁辺に歪みのあるものも認められ、集落内での銅鐸片廃棄のあり方を物語っているようか。貨泉は4枚出土した（本報告）。1点のみ遺構内から出土し、弥生後期初頭の土器を伴う。瀬戸内～近畿にかけての出土例から同様な時期に列島各地に貨泉が流入したことが判明しつつあり、弥生時代実年代論にも関係してこよう。銅鏃の人骨嵌入例は、実用品としての機能を裏付ける。

木器では多彩な容器類を挙げねばなるまい。なかでも従来北陸地方で知られていた弥生後期に属する精巧な作りの高杯が52点確認されたことが特筆される（『青谷上寺地3』、本報告）。52点といっても破片数なので必ずしも個体数を表しているわけではないが、未製品と思われるものも確認されており、こうした精巧な容器類を作った人々、それは技術者集団といってもいいのではないかと思うのであるが、そうした人々の活動舞台を日本海沿岸地域に広げて考える必要が出てきた。近年の山陰地方平野部の調査で弥生中期から後期にかけての木器様相が次第に明らかになりつつあるが（出雲市姫原西遺跡、海上遺跡など）、容器類に関しても程度の差こそあれ本報告で示した多彩な内容は、当時の日本海沿岸地域の一般的な姿であったようだ。姫原西で容器の把手と報告されているもの（報告書第118図2）も上述した高杯の飾り耳ではないかと見ている。中期後葉に位置付けられる「四方転びの箱」、曲物（本報告）は今後議論を呼ぶことになろうが、当該時期における集落の拡大とこうした技術の保有は無関係ではないかもしれない。

骨角器においては豊富な漁労具が目を引く。鹿角製ヤスと中柄の結合例（『青谷上寺地3』）は初出のもので装着法を具体的に示すものとして注目される。ト骨は224点出土しており、弥生時代のものとしては傑出した量である（『青谷上寺地3』、本報告）。時期別に素材のあり方が異なることなど数量的に裏付けられたのも重要な成果である。ト骨集積遺構は本遺跡と朝鮮半島の靉島遺跡にのみ認められるもので、直接交流を示唆するものとして注目すべきであろう（『青谷上寺地2』、『青谷上寺地3』）。

こうした目を引く品々だけでなく、当時の日常生活用具であった土器を中心に数量的分析を試みたことも、弥生時代集落研究法のひとつとして提案しておきたい。

人骨に関しては詳細な分析を本報告第4章第1節に示した。そこから派生する考古学的な問題についても第5章第4節で述べた。確かに『魏志倭人伝』に伝える「倭国大乱」と同じ時期のものであるが、安易にそれと結びつけることは危険であると考えたい。周辺地域を含めてその時期の社会的な変動が考古学的に読み取れる事例を待ちたい。

現地調査・遺物整理・報告書作成にあたっては多くの方々のご協力・ご支援を受けた。その恩に報いることができないまま本書を世に送り出すのは心苦しいかぎりではあるが、たとえ一部でも事実関係を公にすることで調査担当者としての責を果たしたい。

（湯村 功・高尾浩司・野田真弓）

# 報告書妙録

ふりがな	あおやかみじちいせき よん							
書名	青谷上寺地遺跡 4							
副書名	一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	II							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	74							
編著者名	湯村功、高尾浩司、野田真弓、北浦弘人、井上貴央、村上 隆、大澤正己							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-67167							
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あおやかみじちいせき 青谷上寺地遺跡	とっとりけんけたかくん 鳥取県気高郡 あおやちようおおあざあおや 青谷町大字青谷 あざかみじち 字上寺地ほか	31343	1-82	35° 30' 38"	133° 59' 45"	19980407 ~ 20010618	28,089m <sup>2</sup> (1区~ 8区)	道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
青谷上寺地遺跡 (1区~8区)	集落	弥生時代前期	貝塚1、土抗55 溝19、焼土18 集石1、水田1		弥生土器、鉄器、石器 木器、骨角器			
		弥生時代中期	掘立柱建物3 土抗102、溝5 杭列57、集石10 焼土34		弥生土器、鉄器、石器 木器、骨角器		卜骨	
		弥生時代後期	掘立柱建物2 土抗150、溝33 杭列21、土器溜12 焼土37		弥生土器、鉄器、石器 木器、骨角器		銅鐸、卜骨 貨泉、人骨	
		古墳時代~ 奈良時代	掘立柱建物1 土抗7		土師器、須恵器			

鳥取県教育文化財団調査報告書 74

一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県気高郡青谷町

## 青谷上寺地遺跡 4

(本文編 2)

発行 2002年 3月29日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 株式会社 鳥取平版社